様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ２２ 日現在

機関番号：１７７０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ０２０６５

研究課題名（和文）施設における高齢者の友人関係・社会的孤立の測定と関連要因の検討

研究課題名（英文）Measuring friendship and social isolation among the older people in institutions and examining related factors.

研究代表者
安部　幸志（Abe, Koji）

鹿児島大学・法文教育学域法文学系・教授

研究者番号：９０４１６１８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、高齢者の社会的孤立と孤独感を測定し、その影響要因について明らかにすることを目的とした。まず、Hawthorne（2006）によるFriendship Scaleの日本語版を作成し、信頼性と妥当性を検討した結果、原尺度とほぼ同様の信頼性と妥当性を得ることが出来た。次に、高齢者を対象として、孤独感への影響要因を探るための質問紙調査を行った。その結果、孤独感へは認知機能やADL、主観的幸福感、抑うつ、ソーシャルキャピタルが影響していることが明らかとなった。今後は高齢者世代の孤立感や孤独感を予測するために他世代を対象とした調査や地域ネットワーク形成の方法について検討する必要があろう。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究によって日本語版Friendship scaleの信頼性と妥当性が確認されたことで、今後国内における社会的孤立と孤独感のさらなる研究の発展が期待できる。また、高齢者の孤独感の影響要因に関する基礎的データを提供しており、身体的・精神的健康を維持するだけでなく、地域のネットワーク維持の重要性について、貴重な知見を提供していると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to measure social isolation and loneliness among the older people and to clarify the factors that influence them. First, a Japanese version of the Friendship Scale by Hawthorne (2006) was created and examined for reliability and validity and found to be almost as reliable and valid as the original scale. Next, we conducted a questionnaire survey among older people to explore the factors that influence their loneliness. The results revealed that cognitive function, ADL, subjective well-being, depression, and social capital had an influence on loneliness. In the future, it is necessary to study other generations and methods of community network formation to predict isolation and loneliness among the older generation.

研究分野：老年社会科学

キーワード：高齢者　社会的孤立　精神的健康　ソーシャルキャピタル

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

高齢者にとって良好な友人関係を持つことは、精神的・身体的健康を維持するのに非常に有効と言われている。近年の研究では、高齢者が良好な友人関係を構築することの重要性が、認知障害のない高齢者だけでなく（Bergland & Kirkevold, 2008)、軽度認知障害（Mild Cognitive Impairment; MCI）や認知症を発症した高齢者においても認められるという（Leedahl et al., 2015)。一方、社会的孤立は地域に在住する高齢者の要介護度の上昇や認知症の悪化につながり（斉藤ら､2015)､高齢者のケアに関するリソースを大きく消費することが知られている(Ellaway et al., 1999)。そのため、わが国においても高齢者の社会的孤立を取り上げた研究が蓄積されつつあり、社会的孤立基準の検討や（斉藤ら、2015)、社会的孤立をスクリーニングする簡便な尺度の作成が行われてきている（栗本ら、2011)。しかしながら、これまでの研究は、主に地域に在住する高齢者を対象とした報告が多く、介護施設等を利用している高齢者を対象とした友人関係や社会的孤立に関する研究は、わが国ではほとんど行われていない。つまり、介護が必要となり、福祉サービスを利用しはじめることによって、周囲との関係が疎遠になっていると考えられる高齢者は、社会的孤立研究の対象ともなっていなかったと思われる。欧米では、近年の研究によって、高齢者施設内で他の高齢者と良い関係を築くことが出来れば、心理的な支えを得られたと感じることが出来（Roberts & Bowers, 2015)、隠れていたケアのニードや（Cadieux et al., 2013)、社会的ストレングス（Mok & Müller, 2014）に関する貴重な情報を得ることが出来ることが報告されている。たとえ認知症に罹患したとしても、施設に入所したとしても、親しい人間や友人の存在は非常に重要であり、スタッフが施設の中で高齢者同士の良い人間関係を築くための方略を検討する上でも、高齢者施設における友人関係および社会的孤立に関する研究の蓄積が強く求められているといえる。そこで本研究では、高齢者の社会的孤立と孤独感を測定し、介護サービス等の施設の利用との関係について明らかにすることを当初の目的とした。

２．研究の目的

本研究の目的は以下の２点である。

（1）わが国では、高齢者の友人関係および孤独感や社会的孤立を簡便に測定するための尺度が存在しないため、Hawthorne（2006）による Friendship Scale の日本語版を作成し、その信頼性と妥当性を検討する。

（2）高齢者の孤独感への影響要因について検討するために、認知障害や ADL 障害の有無、ソーシャルキャピタル、精神的・身体的健康等を測定し、孤独感との関連について分析する。

３．研究の方法

本研究では、まず、友人関係・社会的孤立を測定する尺度を作成し、その信頼性と妥当性について検討した。次に、高齢者の孤独感や社会的孤立の関連要因について検討し、社会的孤立の軽減に向けた介入方法について示唆を得た。具体的な方法は以下の２点である。

（1）Hawthorne による友人関係・社会的孤立尺度の日本語版作成

高齢者の社会的孤立を測定するための尺度として､これまで利用されてきた尺度は､野口(1991)のソーシャルサポート尺度、岩佐ら（2007）の日本語版ソーシャルサポート尺度、栗本ら（2011）の日本語版 Lubben Social Network Scale 短縮版などがある。これらは地域在住の高齢者における社会的孤立を測定する尺度としては有用であるが、家族や親戚との関係を測定していたり、それらが概念として含まれていたりするため、子どもがおらず、配偶者が亡くなった後に施設に入所した高齢者等のケースでは天井効果や床効果が発生してしまい、社会的孤立状態の正確な測定が不可能となるという短所がある。Hawthorne（2016）が開発した Friendship Scale は、家族・友人を問わず、周囲との関係に着目した簡便な尺度であるため、高齢者の友人関係・社会的孤立を測定するために最適な尺度であると考えられる。しかしながら、未だ Friendship Scale の日本語版が作成されていないため、本研究ではこの Friendship Scale の日本語版の作成を行う。

具体的には、まず著作権者に許可を得た上で、その原尺度の項目をもとに 2 名の翻訳者がそれぞれ和訳を作成し、合議によって１つの和訳版を作成した。次に、その和訳版をもとに別のネイティブの翻訳者によってバックトランスレーションを行った。最後に研究者が原尺度とバックトランスレーションした尺度項目の内容がほぼ同一であることを確認し、表現を微修正した最終版を作成した。

本研究では、日本語版尺度の信頼性と妥当性について検討するために、日本人 435 名を対象とした質問紙調査を実施した。また、基準関連妥当性について検討するために、孤独感と関連が強いと思われる抑うつ尺度（K-6）も同時に測定した（Kessler et al., 2002)。加えて、初回調査の対象者のうち、111 名を対象として１ヶ月の間隔を開け、再検査信頼性を確認するための追跡

調査を行った。

（2）孤独感および社会的孤立の関連要因の検討

高齢者の孤独感および社会的孤立の関連要因について検討するために、65 歳以上の高齢者1500 名を対象とした質問紙調査を行った。本調査では、孤独感の関連要因として、K-6、主観的幸福感、ソーシャルキャピタル、そして認知機能や身体的機能との関連について検討した。

４．研究成果

（1）研究の主な成果

本研究では、まず日本語版 Friendship scale について、原尺度と同じ因子構造が確認されるかどうか検証するため、探索的因子分析および検証的因子分析を行った。その過程において、原尺度と異なる因子構造が抽出された場合、独自の因子構造を有する可能性があると見なし、原尺度と異なるモデルを構築し、比較分析を行った。次に、信頼性を検討するために内的一貫性および再検査信頼性を算出した。最後に、尺度の基準関連妥当性を検証するために、抑うつ尺度（K-6）との相関分析を行った。

まず、原尺度と同様に１因子解を想定して、最尤法による探索的因子分析を行った。その結果、すべての項目の因子負荷量が±.35 以上であることが確認された。また、信頼性を示すα係数は.805 であった。よって、日本語版 Friendship scale も原尺度と同様に１因子構造と見なすことが可能であることが明らかとなった。しかしながら、一部の項目に低い共通性が認められたため、わが国においては、原尺度とは異なり、Friendship scale に複数の因子が抽出される可能性があることが示唆された。

そこで、因子数を事前に固定せず、最尤法プロマックス回転による探索的因子分析を行った。その結果、原尺度とは異なり、固有値の減少やスクリープロットから判断すると、2 因子構造が適切であると判断した。第１因子は「他の人から孤立しているように感じたことが」「他の人達と一緒にいるときに、その人達とは距離があると感じることが」など、個人的な孤独や孤立に関する感情を表す項目によって構成されたため「孤独感」因子として命名した（α＝.836）。第 2 因子は「必要な時に誰かとつながりを持つことが」「他の人と気軽に関わり合うことが」など、他者とのつながりの有無やその程度を表す項目によって構成されたため、「孤立感」因子として命名した（α＝.813）。

この 2 因子間の因子間相関は-.444 であり、異なる因子として抽出されてはいるが、かなり強い因子間相関を有していることが示唆された。

Hawthorne（2006）の研究においても、因子的妥当性を検討するため検証的因子分析を行っているため、本研究でも同様の分析を行った。まず、単純な１因子構造を想定して分析を行った結果、適合度はχ^2（9）= 314.299, $p < .001$, GFI = .765, AGFI = .453, CFI = .678, RMSEA = .289, AIC = 338.299 となり、解釈に値する適合度は得られなかった。そこで、Hawthorne（2006）と同じく、誤差相関を導入したモデルを構築して分析を試みた。本研究においては、Hawthorne（2006）と同様に、項目１と項目 3、項目 3 と項目 4 の間の誤差相関を導入してモデルを構築した。その結果、適合度はχ^2（7）= 162.413, $p < .001$, GFI = .897, AGFI = .690, CFI = .836, RMSEA = .234, AIC = 190.413 となり、初期モデルと比するとやや改善した結果が得られた。

また、2 因子解モデルについても、同様に検証的因子分析を行った。その結果、誤差相関を仮定しない、単純な 2 因子構造モデルにおいて、適合度はχ^2（8）= 4.654, $p = .794$, GFI = .996, AGFI = .990, CFI = 1.000, RMSEA = .000, AIC = 30.654 であった。

日本語版 Friendship scale の再検査信頼性については、初回調査と追跡調査の得点間に強い有意な相関が認められた（孤独感因子 $r = .524$, $p < .001$；孤立感因子 $r = .611$, $p < .001$；総得点 $r = .628$, $p < .001$）。

抑うつと Friendship scale との間には、総得点（$r = .454$, $p < .001$）および孤独感（$r = .557$, $p < .001$）との間に強い正の相関が認められ、孤立感（$r = -.192$, $p < .01$）との間にはやや弱い負の相関が認められた。

高齢者を対象とした調査データの分析の結果は現在分析中であるため、一部のみ報告する。まず、相関分析の結果、高齢者の孤独感と認知障害および身体的障害との間に有意な相関が認められた（$r = .298$, $p < .001$）。主観的幸福感（$r = -.307$, $p < .001$）、抑うつ（$r = -.495$, $p < .001$）とも有意な相関が認められた。次に、ソーシャルキャピタルとの関連については「ご近所の人は信頼できる人が多いですか」項目と有意な相関が認められた（$r = .240$, $p < .001$）。加えて、「ご近所つき合いは積極的にしている方だと思いますか」項目とも有意な相関が認められた（$r = .285$, $p < .001$）。

これらの変数を用いて重回帰分析を行ったところ（$R^2 = .322$, $p < .001$）、認知障害および身体的障害は有意ではあるが、孤独感に対してはやや弱い影響を与えていた（$\beta = .085$, $p < .001$）。同じく、主観的幸福感も有意ではあるが、やや弱い影響が認められた（$\beta = -.083$, $p < .001$）。抑うつは有意に強い影響を与えていたが（$\beta = -.399$, $p < .001$）、そもそも孤独が故に抑うつとなる可能性もあり、概念の重複と因果の方向性について検討する必要があろう。

ソーシャルキャピタルについては、「隣近所の人は信頼できる人が多いですか」項目は孤独感への影響が認められなかった。一方、「ご近所つき合いは積極的にしている方だと思いますか」項目は、孤独感に有意な影響を与えていた（$\beta = .223$, $p < .001$）。つまり、本研究では高齢者

の孤独感に対し、ソーシャルキャピタルの重要な要素の一つである「信頼」が影響しておらず、もう一つの重要な要素である「ネットワーク」のみが有意に影響を与えていたということになる。本研究データのみで地域におけるネットワーク形成に関する具体的な方法について検討することは困難であるが、今後高齢者の孤独感を軽減するための手法について、地域に根ざしたネットワーク形成方法を開発することが極めて重要であると考えられる。

（2）得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

本研究によって日本語版 Friendship scale の信頼性と妥当性が確認されたことで、今後国内における社会的孤立と孤独感のさらなる研究の発展が期待できる。また、近年増加しつつある欧米やアジア諸国で行われている Friendship scale を用いた研究結果との比較分析も可能となると考えられる。

高齢者の孤独感および社会的孤立に関する調査データについても孤独感の影響要因に関する基礎的データを提供しており、精神的健康や地域のネットワーク維持について、重要な知見を提供していると考えられる。

（3）今後の展望

本研究では主に高齢者の社会的孤立に着目して調査を行ってきたが、コロナ禍による影響によって、様々な世代における社会的孤立が重要な問題となりつつある。高齢者世代の社会的孤立を予測するためには、高齢者世代を対象とした調査だけでなく、成人期あるいは青年期からの縦断的研究が必要である。今後は、高齢者世代のみではなく、他の世代を対象とした調査データを蓄積しつつ、大規模な縦断的研究の実施が強く求められる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 安部幸志・篠原愛依	４．巻 88
２．論文標題 大学生におけるエイジズムが高齢運転者への態度に与える影響	５．発行年 2021年
３．雑誌名 鹿児島大学法文学部紀要　人文学科論集	６．最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 安部幸志	４．巻 90
２．論文標題 日本語版フレンドシップスケールの作成と信頼性・妥当性の検証： 社会的孤立を測定する新しい尺度開発の試み	５．発行年 2023年
３．雑誌名 鹿児島大学法文学部紀要　人文学科論集	６．最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　4件）

１．発表者名 Koji Abe
２．発表標題 An application of a daily diary method for family caregivers of individuals with dementia in Japan
３．学会等名 American Psychological Association 2020（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Koji Abe
２．発表標題 A pilot study of the effects of informal service on Japanese Family caregivers’ daily fluctuation of stress
３．学会等名 The Annual Scientific Meeting of the Gerontological Society of America 2020（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Koji Abe, Hyuma Makizako, Takayuki Tabira, Takuro Kubozono, Toshiro Takenaka, So Kuwahata, Mitsuru Ohishi
２．発表標題 Attitude towards death and depression among community-dwelling older adults in Japan
３．学会等名 The 11th Asia/Oceania Congress of gerontology and Geriatrics（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Koji Abe
２．発表標題 Psychological mechanisms of PTSD syndrome and depression among elderly victims of flood-disaster in Japan
３．学会等名 Gerontological Society of America（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 安部幸志
２．発表標題 新型コロナウイルス感染症流行下における独居高齢者の孤独感
３．学会等名 日本老年社会科学会第64回大会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関